

ビリギャルの話から(その1)

2015年頃、「ビリギャル」が話題となり、映画化もされました。偏差値30のギャルのような女子高生が、ある1人の塾講師と出会い、猛勉強して、1年間で偏差値を40上げ、偏差値70の慶応義塾大学(以下:慶応)に現役入学した、ノンフィクションのお話です。

※偏差値=主にテストの点数を評価するときに使われる値、平均点をとった人の偏差値はちょうど50で、平均よりも高い点であるほど、その人の偏差値は55,60,65,70と高く、平均よりも低い点であるほど、その人の偏差値は45,40,35,30と低くなる。大学入試では良く使うが、中学校ではあまり使わない。

その当時は、すごい話題となっていました。日々の職務に忙殺され、本や映画を見る余裕はありませんでした。改めてビリギャルを指導した先生とビリギャルの母の本を手に入れ、読んでみるとこれからの教育活動に生かせそうな内容ばかりです。本の一部を引用しながら、私なりに考える機会にしてみたいと思います。



ビリギャルのさやかが慶応を目指したのは?

私立高校でビリの成績でしか、非行少女のレッテルを張られたさやかを連れて母が塾講師の坪田先生のところを訪れます。坪田先生は「見た目は派手だが、根はいい子、挨拶がきちんとできる」と評価します。「聖徳太子」を「せいとくたこ」と読んでも笑って対応します。そのうち、次のように促します。

「君は人が大好きなんだね。いつも誰かの話をしてるもんな。慶応に行って出会う人は、きっと君にいろいろな刺激をくれて、一緒にいるだけでいろんなことを教えてくれる。そして、自分は本当に何がしたいのかも、そこで見つかるだろう。それが何より君の人生にとって一生の財産になるんだ。」

このことばを受け、さやかは以下のように考えました。

「そこには、一体どんな人たちがいるんだろう。どんな友達が、どんな先輩がいるのだろう。そして、その人たちは、私にとってどんな存在で、それによって私はどうなるのだろう。早く私の未来の友人に会いたい。」そう考えてワクワクすることが、私の受験勉強の原動力になったのです。

「慶応」だけでなく、上級学校を目指すことは、新しい出会いがある、自分を高めてくれるというこの思いがとても大切ではないかと思います。もちろん、進学するすべての人がそうではないと思います。将来の夢や希望があり、それを目指して進学することはとても大切です。

例えばお子さんに次の質問をしてみてください。

ここにプラチナチケットがある。なんでも夢が叶う。願い事を何でも叶えてくれる。なりたいものにならせてくれる。連れて行ってほしいところにも連れて行ってくれる。このチケットを持っていれば、どんなお願いをする?



お子さんはなんと答えるでしょうか。明確な答えがあるでしょうか。目先の欲しいものや行きたい場所を言うでしょうか。

この質問は心理学に基づいているようで、プラチナチケットの答えは「将来の夢や希望」を表しているようです。明確な答えがなければ、まだ将来が定まっていなるととらえられるようです。中学校で生徒と関わっていると、「将来は漠然としている」生徒がほとんどです。

上級学校を目指すのは、もちろん将来に生かせる知識・技能を身に付けることですが、それと同時に、様々な人と関わり、自分の存在を確かめ、磨き、他との刺激の中で、人格形成をすることではないかと思うのです。

ビリギャルが、「人が好き」というエピソード

坪田先生は初対面の時に、この生徒の良いところはなんだろう、と必ず5つは探すことを習慣づけているそうです。最初に相手のいやなところ見つけてしまうとその印象にとらわれ、その場面が楽しくなくなる、相手も受け入れられる感じがなくなり、関係がギクシャクします。

さやかが学校のクラスに「どうしてもムカつく」「あの子がいるとイライラして勉強に集中できない」というので、「その子の良いところを、無理にでも10個、紙に書き出してごらん」と促したそうです。さやかは素直なので、一晩かけて書き出してきたそうです。するとむしろ、「その子ってめちゃくちゃ良い子なのかも？」と思えてきたそうです。それで、翌日からは、その子と普通に話せるようになったそうです。

さやかは「すごいテクニックを聞いちゃった!」と思ったそうです。「人の短所は長所でもあり、長所は短所でもある、すべては考え方次第なんだな。」ということを学んだようです。私たちも是非そういった考え方で、他の人を見たいと感じます。

「学ぶこと」へのワクワク感

さやかの母が、自身の著書の中で、坪田先生との出会いから、次のように言っています。

さやかは、坪田先生と出会うことによって、学ぶことに底知れぬワクワク感を見出したのでした。知らないことを知るのは、人間にとって、もともとはワクワクすることなのではないでしょうか。でも多くの学校では、そのワクワク感を正常に機能させられず、先生方も悩まれているのではないかと想像します。一方ワクワク感を感じられないでいる生徒たちの中には、上からの押し付けへの反抗心や嫌悪感、学ぶことへのアレルギー反応ばかり抱いてしまう子が出てきます。学ぶことの喜びや楽しさを知らずに育ってしまうのは、子どもにとっても社会にとっても不幸なことだと思います。

坪田先生は、さやかとのやりとりの中でこう述べています。『『なぜ?』『なぜ?』と生徒に聞かれていくと、教師側が知らない問題に案外早く到達するものです。そんなとき、『うるさい』と思ったり、『先生に恥をかかせたいのか』と怒りを覚えたりしてはいけません。僕はそういった場合、『先生もそこまで知らないから、一緒に調べてみようか』とっていました。知識に立ち向かう教師と生徒の関係性は、こうあるべき(図)だと思っています。結局は、そうした姿勢が、生徒との深い信頼関係を築くことになる、僕は信じています。』

なるほどと思うと同時に、これらの姿勢を教師だけでなく、親としても取り組んだら、その子はワクワクして勉強に取り組むそうです。

